



TITLE:

# 均輸平準と桑弘羊：中國古代における財政と商業

AUTHOR(S):

山田, 勝芳

---

CITATION:

山田, 勝芳. 均輸平準と桑弘羊：中國古代における財政と商業. 東洋史研究 1981, 40(3): 411-437

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153837>

RIGHT:

# 東洋史研究

第四十卷 第三號 昭和五十六年十二月 發行

## 均輸平準と桑弘羊

——中國古代における財政と商業——

山 田 勝 芳

### 序

前漢武帝代、新財政策の一つとして實施された均輸平準は古來有名であるが、唐の劉晏及び宋の王安石の財政經濟策に大きな影響を与えたことによつて一層その歴史的意義を増した。ところがかくの如き重要性にも拘らず、制度そのものについて未だ共通の理解に達していない所が多いのである。試みにこれに觸れた諸研究を通讀してみても、そのあまりの多様性に驚くほどであり、均輸によつて調達した物資はそれ以前の何を轉換したものなのか、均輸の具體的運用狀況は如何、という最も基本的な問題についても意見が分れてゐるのである。その中であつて通説的位置を占めるのは吉田虎雄氏の説<sup>(2)</sup>である。

均輸とは、民が錢や物で納めるべき租税と諸侯の貢獻はその土地に多く産する物品に換えて納めさせ、官はそれをその物品の不足し價格が騰貴してゐる所に輸送・販賣して物價調節と利益獲得を實現しようとしたものであり、元鼎二年（前

一一五)に試辦の形で實施され、次いで元封元年(前一〇)に長安に平準を設置すると同時に全國的に施行された。平準とは、京師に置かれた委府に各種の貨物を集積し、それを以て物價を調節するとともに利益を擧げることが策したものである。そしてこのような均輸平準が實施されるに至る歴史的前提として、儼人<sup>(3)</sup>による郡縣の貢賦輸送が抱えていた種々の問題點を解決することと、官需物資購入の際の商人による物價介入を排除することが要請されていた、という事情があった。更に、漢書地理志に見える橘官・木官などはその地の特産物によって命名された均輸官であり、均輸は行商的工作、平準は坐賣的工作とする馬元材説<sup>(4)</sup>を認めつつ、均輸は空間的な物價の調節、平準は時間的な物價の調節を目的とし、兩者ともに前漢末まで存続したとする。

これが吉田説の大意であり、根本史料たる史記卷三〇平準書と鹽鐵論本議篇の記事を調和的に解釋したものである。これに對して影山剛氏が次のような批判をしている。<sup>(5)</sup>

均輸は漢初に存在した、郡・國が毎口六三錢を徴收して行つた貢獻制を合理的に再編成し改革したものであり、その背景には貢獻をより實質的な中央財政の財源に轉化しようとする構想があつた。そして運營の現實においては實質的に布帛類を租税として收納する如く新しい賦課の形で財物を調達した。また京師に設置された平準は地方から招置された工官作製の諸器具と均輸の輸送した物品とを以て物價を調節し、且つ利益を擧げるものであつた。この點、平準は官營商業的側面を有していることができるが、均輸による物資供給が、國家の直接的收奪に依據している以上、均輸平準を官營商業と規定することはできない。

この影山説は、平準書よりもより鹽鐵論の方に比重を置いたものであり、通説的な官營商業論を批判したものである。しかしその論證に問題があると思われ、筆者は既に注記の形ではあるが、租税や貢獻を轉換改革したのではなく賦錢を轉換改革したと考えねばならないと批判を加えたことがあり、この考えは基本的に變つておらず、本稿はそれを發展させることを目的とする。また最近では侯家駒氏の研究が重要である。<sup>(7)</sup>

平準書集解引、三國魏の孟康注に、

謂諸當所輸於官者、皆令輸其土地所饒、平其所在時價、官更於他處賣之、輸者既便、而官有利。(漢書卷一九上 百官公卿表上注引と若干文字の異同あり)

とあるが、この「賣」は「買」とすべきである。即ち、京師から遠い所では、當地の人民が賦税として納めるべき實物、物價が高い時の商人の販賣價格を基準として錢に折算し、それに運賃と、以前その物の販賣で商人が得ていた利潤分を加えた合計額を人民から徴收して、その錢を輸送し、京師乃至その周邊で必要な實物を買った。また京師にやや近い所では均輸官が當地の人民をして實物を納入・運搬させ、縣毎に次々と京師に向けて輸送する。これは元封元年段階の均輸であるが、元鼎二年の段階では、折納の現金乃至布帛を京師に送り、或いはその現金を以って京師乃至他處において布帛を購入して中央政府に入れたが、京師での物價騰貴という弊害が生じたので、元封元年、統一賣買機構たる平準を設置し、遍く均輸を置くに至ったのである。また鹽鐵論所見の均輸は後期のものであること、均輸官と鹽鐵官は密接な關係を有し、鹽鐵產出地の均輸官はその運出を行った。

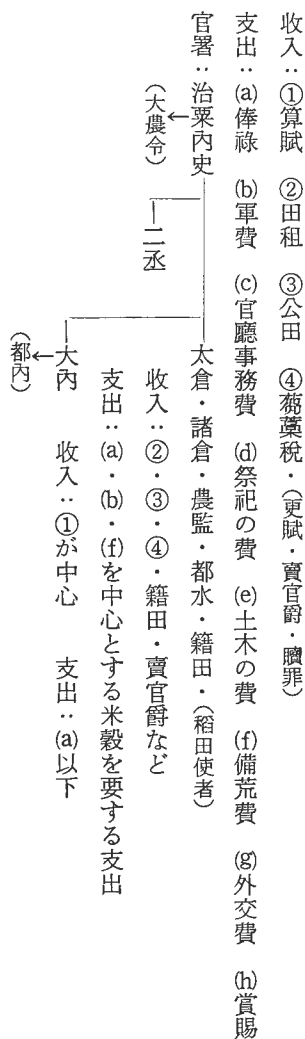
この説は、宋代の均輸法——必要物資調達の際、發運使ができるだけ京師に近く、且つ物價の安い所で收買・貯藏し、運搬する<sup>(8)</sup>——に引付け過ぎた理解であり、これに従えば商人による諸物資の京師への集中を前提とせざるをえず、桑弘羊の構想と相容れないものとなり、また實物を錢に折して運搬するという點は成立し難いものと考ええる。

本稿においては、以上の如き研究史を踏まえて、均輸平準の設立に至る歴史的経緯、その運営原則、實施の實際、運営機構、歴史的變遷等の総合的な考察を通して筆者の均輸平準に對する理解を提示することを目的とする。また均輸平準は桑弘羊の代表的な財政政策である以上、彼の財政經濟理論にも關係させざるをえないし、それが武帝代新財政政策の中でもすぐれて商業的性格が濃いものである以上、當代における財政と商業の關係を浮彫りにするものともなるであらう。これが本論題の所以である。

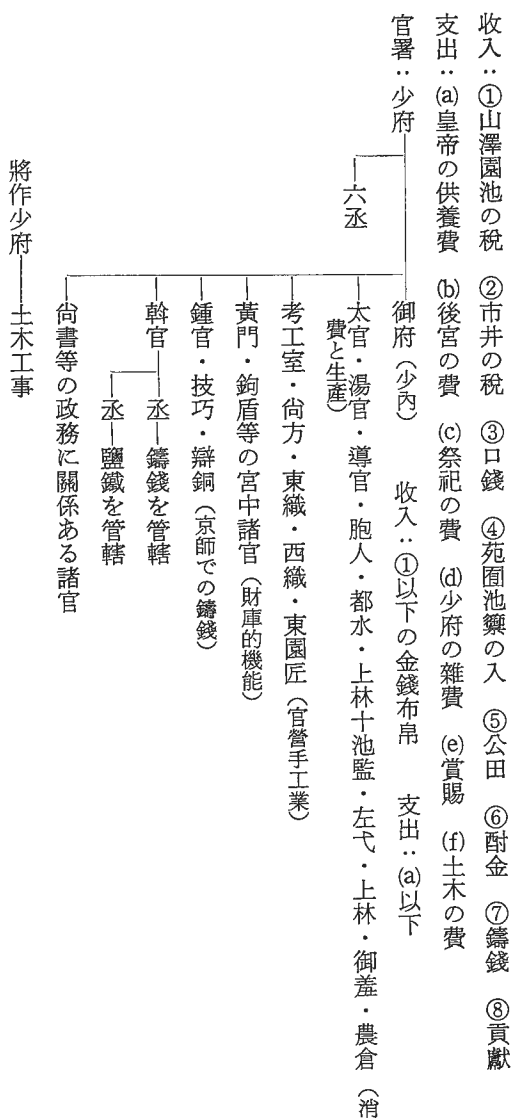
財政史研究とは、畢竟、政治と財政、社會經濟と財政の相互關係、即ち政治と社會經濟の接點を考察するものに他ならない。それ故、一般論的に相互關係を論ずるだけでなく、その相互關係を規定する論理の剔出こそが重要である。武帝代に至る財政史に即して言へば、財政と社會經濟の相互關係を規定するものは人口の増加と商工業の發達である。なぜなら、國家財政收入の柱たる算賦・田租收入は人口と土地に比例し、その多くが商工業關係收入である帝室財政收入は商工業の發達と相關するからである。そして財政と政治の相互關係を規定する最大の問題は、廣大な領域と、統治權のみならず租稅・賦斂・徵役權をも有した諸侯王國の存在、即ち郡國制であつた。これによつて漢直轄郡の田租・算賦收入のみならず

### 前漢前期の財政機構圖

#### 〔國家財政〕



## 〔帝室財政〕



らず、山澤園池の税などの税収も大きな制約を受けざるをえなかったが、漢直轄地の商工業の發展と膨大な帝室財産の存在が帝室財政收入においてはその影響を減少させ、結局、帝室財政規模が國家財政のそれを上回っていた。この状況を大きく變えるのが、吳楚七國の亂平定後に進められる王國の領域の削減と、賦斂・徵役權等の中央への回收であった。その結果、武帝初期の兩財政は極めて豊かなものになっていた。

以上のことは既に論じたことではあるが、武帝代財政史の考察にとって必要な前提であると考ええる。また武帝代に至る

前漢前期の財政機構圖を右に掲げ、前漢前期財政の理解に資したい。<sup>(10)</sup>

この漢初の財政政策全般を擔當したのは丞相府であつた。それは何よりも蕭何の存在に負う所が大きい。軍糧と兵卒を絶えず高祖に補給し續けた彼の功績は改めて述べるまでもない。彼は、

何守關中、侍太子、治櫟陽、爲法令約束、立宗廟社稷宮室縣邑、輒奏上、可、許以從事。卽不及奏上、輒以便宜施行、上來以聞。(史記卷五三蕭相國世家)

とある如く、漢初の政治全般の施策を講じていたのであり、高祖四年(前二〇三)八月の算賦の制定も彼の手に成るものであろう。その結果、丞相府の機能は強化され、列侯たる張蒼を計相に任命して丞相府に置くまでになる(漢書卷四二張蒼傳)。秦代、既に文書行政の中心に位置するに至つたと思われる丞相府はここに一層その重要性を増すことになった。そこに、

平曰、陛下卽問決獄、責廷尉。問錢穀、責治粟內史。上曰、苟各有主者、而君所主者何事也。平謝曰、主臣。陛下不知其驚下、使待罪宰相。宰相者、上佐天子、理陰陽、順四時、下育萬物之宜、外鎮撫四夷諸侯、內親附百姓、使卿大夫各得任其職焉。(史記卷五六陳丞相世家)

とあるような丞相論が陳平によつて開陳される理由があり、天下の錢・穀を扱う治粟內史の職掌は丞相の指揮監督下に遂行されたと考えるべきであらう。このような丞相府の権限は基本的に武帝代まで變らないが、景帝代に御史大夫鼂錯が政策決定に重要な役割を果たした如く、皇帝と親近な者が文書起案をも行つたとみられる御史府の長となつた場合にはそれが動搖することがあつた。<sup>(12)</sup>

史に「雄材大略」(漢書卷六武帝紀贊)と稱される武帝の即位は右の如き狀況に變化をもたらさざるをえない。十六歳で即位した武帝は早くから積極的な内外諸政策を展開する。建元六年(前一二五)までは祖母竇太后に、それ以後、元光四年(前一二二)までは舅にあたる田蚡に制約されたにも拘らず、上林苑の擴張、閭越介入、儒教一尊、孝廉制、匈奴との

和親策破棄など、既にこの段階で傳統的政策の枠を超える諸政策が實施されているのである。このような武帝の政治は具體的にはどのようなプロセスを経て實現されたのであろうか。漢書卷六四上嚴助傳に、

(嚴助爲中大夫)、後得朱買臣・吾丘壽王・司馬相如・主父偃・徐樂・嚴安・東方朔・枚皋・膠倉・終軍・嚴葱奇等、並在左右。是時征伐四夷、開置邊郡、軍旅數發、內改制度、朝廷多事、婁擧賢良文學之士。……上令助等與大臣辯論、中外相應以義理之文、大臣數詘。

とある如く、武帝の側近の役割に注目する必要がある。閼越介入の際、派兵に消極的な太尉田蚡を難詰したのは帝の意を承けた嚴助である。また元朔二年(前二七)に民十萬を朔方に移し、翌年朔方城を築いたのも、主父偃の提言を、御史大夫公孫弘の反對には侍中朱買臣の難詰を以って封じ、實施したのである(漢書卷五八公孫弘傳、同卷六四上朱買臣傳、同主父偃傳)。このような侍臣を手足として政治を行う「賢明」な皇帝が上にあれば、必然的に丞相の地位に變動を來たさざるをえずそれは公孫弘傳及び公孫賀傳(漢書卷六六)に遺憾なく示されている。公孫弘以後、誅死者が相繼ぎ、弘の開いた丞相府の客館も車庫と奴婢部屋になつてしまつた。政治全般にわたつて獨裁を強めようとした武帝は陳平の言うような丞相論を許容できなかった。かくして前代の如き丞相府の機能は失われた。武帝は宰相たるにふさわしい人物よりも、手足として使うことができる多方面のエキスパートを求め、それを左右に置いた。その結果が漢書卷五八公孫弘卜式兒寬傳贊に見られる武帝代の人物像なのである。

この丞相府とは對照的に、御史大夫張湯が政策全般に關與してくる(漢書卷五九張湯傳)。政策はその實行を伴わない限り無意味であるから、外朝にあつて帝の意を承けて諸官を指揮してそれを實行する者が必要であり、その任に當つたのが張湯であつた。そしてこの張湯が役割を終えた時(元鼎二年)、それまで様々なエキスパートとして武帝の左右、或いは諸官にあつて親任されていた者が政治の表舞臺に登場してくる。桑弘羊の大農丞就任は、政治史的にはこのようにとらえることができる。やがて桑弘羊は治粟都尉領大農となるが、一方、少府には趙禹・王溫舒、水衡都尉には閼奉・江充という酷



吏が任じられた。<sup>(13)</sup>これは彼等が皇帝に忠實な役人として行動したし、またそれを期待されたからこそ任命されたに過ぎない。これが重要なのである。かつて内藤湖南は、武帝代の財政經濟について、後世の凡庸な注釋家の頭では理解できない改革であり、平準書の本文そのものについて考えねばならないと述べたが、<sup>(14)</sup>そのような劃期的な改革が可能であったのは、絶對の專制君主武帝の下で、かえって桑弘羊等の財政エキスパートの自由な運営が可能になったからであつた。ここに傳統に拘束されることなく、斬新にして且つ大膽な改革を實行しえた根本的な理由が存するのである。

## 二

元光二年（前一二三）の馬邑の變以後、とりわけ同四年の丞相田蚡の死後に急激な對外發展策が實施に移された。翌五年には西南方面への進出が圖られ、同六年には本格的な匈奴との戦争が開始され、以後元狩四年（前一一九）まで連年續いた。これが新財政政策を必要とした最大の理由であつたことは贅言を要しない。元朔三年（前一二六）頃には「費數十百巨萬、府庫益虛」、同六年には「大農陳藏錢經耗、賦稅既竭、猶不足以奉戰士」、元狩二年には「是歲費凡百餘巨萬」とあるような大出費を強いられ、また並行して行われた諸渠開鑿にそれぞれ十億以上の費用を要したこともあつて、遂に「出御府藏以贍之」という措置をとらざるをえなかつた。<sup>(15)</sup>

この間、元光年間に賣官・贖罪、元光六年に「算商車」、元光六年以後元朔初年頃、西南方面への進出に際し、

悉巴蜀租賦、不足以更之、乃募豪民田南夷、入粟縣官、而內受錢於都内。（平準書）

とあるが如き措置がとられ、また元朔三年頃には賣復・賣官が實施され、同六年には天子が賣爵・贖罪を審議させたのに對し、有司は武功爵の施行を上言した。この間の國家財政の直接の責任者は大農令鄭當時であつた。漢書百官公卿表下によれば、彼は元光五年（前一二〇）に就任し、「十一年にして免ぜられた」。元狩四年（前一一九）に顔異が大農令に就任しているから、<sup>(16)</sup>ほぼこの元狩三・四年頃まで鄭當時が大農令であつた。彼は諸家の指摘する如く、任俠にして黃老の言を好

む古いタイプの人間であつた。彼の上言による渭水南岸の漕渠建設は武帝代の諸渠建設の先驅となることからしても、右の如き諸財政策における彼の役割を無視できない。しかし算商車の如きは彼が商人と深い關係にあつたことからしても彼の案とは思われず、また武功爵のような從來の賣爵とは全く異なつた新方策についても同様である。<sup>(1)</sup>とりわけ先述の田南夷策の如きは全く新しい考え方であり、鄭當時の案とは思われない。これは豪民が現地において開田・田作し、その米穀を現地の官に納め、その代價を京師の大農屬官の都内から受領するというものであり、大量の勞働力を現地において組織し、且つ京師においてその代價を受領するためには、廣範な商業を営む者にして始めて可能であり、結局、この募に應じうる豪民とは商工を営む巴蜀の富人に限定されざるをえない。このような發想は宋以後の北邊での穀物調達法の一祖形として位置づけうる新しさをもっている。

かくの如き新財政策は、前述の政策決定のプロセスを顧れば、武帝側近の財政エキスパートの發案になるとすべきであろう。そしてその一人として桑弘羊をも擧げうるのではなからうか。それにしても、鄭當時がこの困難な時期に、かくも長期にわたつて財政を擔當することができた理由は何であらうか。それを探る鍵は彼の失脚事件の中に示されている。

及晩節、漢征匈奴、招四夷、天下費多、財用益匱。莊任人賓客爲大農儻人、多逋負。(史記卷一二〇汲鄭列傳)

とあるのがそれである。彼の下に集つた多くの商人を大農管掌の財物運搬に使つたが、その請負額に不足する者が續出したために彼は失脚したのである。これは逆に彼の商人組織力が非常に大きかつたことを示すであらう。

商君書繆令篇に、

令送糧無取儻、無得反庸、車牛輿重、設必當名。

とある如く、糧運の役に儻(一車を雇傭して運搬すること)を用いてはならないとあり、新出秦簡效律第四九簡にも、

上節發<sup>レ</sup>委輸<sup>一</sup>、百姓或<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>縣就及移<sup>レ</sup>輸者<sup>一</sup>、以<sup>レ</sup>律論<sup>レ</sup>之。(『睡虎地秦墓竹簡』一九七八年版二二三頁)

とあり、糧運等の役の際には儻は禁じられていたが、實際上、秦代においても廣く儻が存したものと考えるべきである。

また漢代においても、漢書卷九〇酷吏・田延年傳に、

初大司農取民牛車三萬兩爲僦、載沙便橋下、送致方上、車直千錢、延年上簿、詐增僦直車二千、凡六千萬、盜取其半。

とあり、新出居延簡 EJT11:13 に、<sup>(18)</sup>

(男子字海) 以牛車就載藉田倉爲事。

とある如く、官需物資運搬等に廣く用いられ、僦によって生計を立てている者もあった。或いはまた新出居延簡 EPT22:1<sup>(19)</sup> の寇恩の如く、官吏個人のために、運搬・販賣のみならず、生産(漁業)までも請負っている例もあった。

かくの如く、官需物資の調達に、生産さえも行う商人層を僦人として使うことは前漢前期の自由經濟的な經濟の下では有利なものであったろう。當初は、鄭當時の下に集まった商人たちの力によって大農の物資調達はうまくいっていたに相違ない。しかし財政逼迫下、商人のうまみは減るのみならず最初から赤字を覺悟しなければならなくなる。そこに「逋負」が増加する理由があった。そしてこれは大農による舊來の物資調達法がこの時點で行き詰まったことを示すものであり、このことは均輸を必要とするに至る重要な要因となった筈である。

更にここで、重要だと思われるもう一つの問題を検討しておきたい。それは元狩二年、國家財政補填のために少府の御府所藏の禁錢を支出したことである。これまで國家財政は苦しいながらも、舊來の財政策と、財政エキスパート發案にかかる若干の新方策を実施することで凌いできたのであるが、この時限界に達したのである。一方、帝室財政は奢侈好みの武帝の下、確實に支出額を増してきたのであるが、それでも國家財政に比べればるかに豊かであった。誰の目にもこの難局を切り抜ける方策は明らかであった。帝室財政からの補填以外にないのである。ここに至って、自己の自由になる龐大な財によってその奢侈欲を満足させつつ、即位當時の豊かな國庫をもとに諸政策を遂行しようとした武帝もその限界を認識せざるをえなかった。しかも事態は禁錢支出という臨時的補充策で済ますことができないまでになっていた。恒常的

に國家財政を補助し得る方策を實施しなければならない。かくして實施された元狩三年の鹽鐵の移管<sup>(2)</sup>という財源そのものの移管は、武帝の熟慮を経て決斷されたものと考えねばならない。天子の私財を割かせることは臣下にとって容易ではなく、たとえそのような奏があつたとしても極めて遠慮勝ちなものであつたらう。前年三月に丞相公孫弘が死亡しているが、この頃には丞相府の地位低下は明らかとなつていたに相違なく、武帝にとつてはたとえ財源を國家財政に移管したとしても、兩財政が相俟つて武帝の欲望充足のために使われるのであれば問題がなくなつていたのである。これが、唯に鹽鐵のみならず國家財政への多方面の移管を可能とし、それに基いて新財政政策を展開することができた一因であつた。

## 三

張湯が罪死した元鼎二年（前一二五）、孔僅が大農令となり、桑弘羊が大農丞になる<sup>(23)</sup>。かくして武帝側近の財政エキスパートたる桑弘羊が財政を直接掌握することになった。と同時に、平準書に、

而桑弘羊爲大農丞、筭諸會計事、稍稍置均輸、以通貨物矣。

とある如く、彼の手によつて初めて均輸が設置された。<sup>(24)</sup>「均輸」について、陳直氏は越絕書卷二に「西倉名曰均輸」とあるのに據つて、この語は戰國末期に既に存在したとする。また朱希祖氏は逸周書大聚解の「市有五均、早暮如一、送行逆來、振乏救窮。」とある「送行逆來」を以つて均輸の機能に當てる。<sup>(25)</sup>しかし倉名と市における物品流通を以つては「均輸」を十分に説明しきれない。やはり諸家の指摘する如く、九章算術卷六均輸に見られる、距離・人口・物價・運賃等を勘案してその負擔を均等化する「輸を均しくする」所にその原義を求めねばならない。均輸は何よりも物資の輸送を擔うものとして設立されたのである。後の鹽鐵論議の際、桑弘羊は均輸設立における輸送の合理化の側面を強調している。「均輸則民齊勞逸」とはそのことを示し、それに對する文學の言に「蓋古之均輸、所以齊勞逸而便貢輸、非以爲利而賈萬物也。」（鹽鐵論本議篇）とあるのも、その商業性を批判しつつも、「古之均輸」という言回しでその物資輸送の合理性を認めざる

をえなかったことを示すものである。そしてまたその段階でも桑弘羊の言にも拘らず、「利のために萬物を賣っている」均輸運営の實態が浮彫りにされているのである。しかし桑弘羊の主観においては、均輸創設の際、物資輸送の合理化を策したことは自明であり、それだけに鹽鐵論議の時に改めてそれを強調したものと考えねばならない。なぜ「均輸」なのか、という問いこそが問題を解決するのである。

かくして設立された均輸は具體的にはどのようなものであつたのであろうか。それを探る重要な手掛りは前述の鄭當時が組織した儆人による大農の物資調達である。それは既に元狩三・四年頃には崩壊していた。しかし元狩四年に實施された鹽鐵專賣・算緡錢・算車船等によって大農の慢性的收入不足は一息つき、商人からの買上げによって物資を調達できたが、それは官にとって決して有利な方法ではなかつた。物資調達に奔走していた大農が、機を見るに敏な商人に高いものを買わされたことは火を見るより明らかであつた。財政運営の實際にタッチすることになった桑弘羊はまずこの點を改革しようとして均輸を創設したのである。それは物資の調達・運搬を官自らが行うものでなければならぬ。物資の運搬には京師への輸送路上に設けられた均輸官が當り、物資の調達もまたこれらの均輸官、とりわけ必要物資の產地近邊に設置された均輸官が随時購入することでまかなわれたものと推測する。問題は運搬の實際であるが、桑弘羊は均輸による運搬の合理化を主張し、文學もそれを認めるのであるから、徭役によってその勞働力を調達したとは思われない。鹽鐵論禁耕篇に、

良家以道次發儆運鹽鐵、煩費、百姓病苦之。（王利器校注本による）

とあるように、民を徴して儆人としたか、或いは專業の者を儆人としたと考える方が適當である。均輸官はこの儆人を組織し、合理的な運搬を行ったのである。この儆直を支拂つても、官の自運の方が商人から買上げるよりもはるかに安くついたのである。従つてこの段階においても、均輸の設置は商人の利を奪うものとならざるをえない。

## 四

鹽鐵專賣や楊可の告緡（元狩六年施行、元鼎三年猛威を振う）によって財政に餘裕が生じたものの、元鼎五・六年頃の南越出兵、西羌討伐、西北邊境の開發等によって、その費用支辨を一手に引受けた大農はまた「錢少」の状況に追い込まれ、また南方の初郡十七を維持するための費用も巨額に達した。しかし、平準書に、

大農以均輸調鹽鐵助賦、故能贍之。

とある如く、元鼎六年（前一一）、均輸による鹽鐵の調整を行うことによって賦錢收入を補完しえたという。これについては、佐藤武敏氏が均輸と鹽鐵の密接な關係を主張し、<sup>(28)</sup> 影山氏は均輸と鹽鐵が別個な體系であることを強調する。<sup>(29)</sup> 筆者は、これは鹽鐵の均輸的操作による收利擴大をめざしたものと考える。

鹽鐵專賣は國家による獨占の上にこそ維持が可能なるものであるから、諸侯王國內のそれも全て中央政府の統制下に置かなければならない。それを實行したのは御史大夫張湯であった。彼は有力諸侯王たる趙王と鐵官をめぐる争った際も斷固として趙王の訟を退けており（漢書卷五九張湯傳）、この元鼎元年頃には王國の鹽鐵は中央政府にはば回收されていた。この頃次の如き事件が起っている。

元鼎中、博士徐偃使行風俗。偃矯制、使膠東・魯國鼓鑄鹽鐵。……湯以致其法、不能詘其義。有詔下軍問狀、軍詰偃曰、……且鹽鐵、郡有餘臧、正二國廢、國家不足以爲利害。……又詰偃、膠東南近琅邪、北接北海、魯國西枕泰山、東有東海、受其鹽鐵。偃度四郡口數田地、率其用器食鹽、不足以并給二郡邪。將勢宜有餘、而吏不能也。何以言之。偃矯制而鼓鑄者、欲及春耕種贍民器也。今魯國之鼓、當先具其備、至秋乃能舉火。此言與實反者非。（漢書卷六四下終軍傳）

この事件を馬元材氏は元鼎元年のこととしている。<sup>(28)</sup> 影山氏は史料中の「鹽鐵」という言葉は「鹽」のみ或いは「鐵」の

みを指す場合があり、この場合は膠東・魯國で冶鐵を行つたのであらうとする。影山氏の「鹽鐵」という言葉に對する解釋は正しいが、筆者は魯國では冶鐵、膠東國では煮鹽を行つたと考える。このことについては既に言及したことがあるので詳述しないが、強調しておきたいのは、鹽鐵專賣實施後、王國の鹽鐵を廢し、王國には漢直轄郡からの輸送によつて供給しており、これが鹽鐵を中央に回收する一つの段階をなしたということと、鹽鐵生産地からの輸送に當つては人口・田土から割り出された必要數量に従つていたとみられるということ、そして泰山・東海の鐵が魯國へ、北海・琅邪の鹽が膠東へという如く、交通等を勘案した供給體制ができていたということである。即ち、鹽鐵專賣は人口・田土の把握という郡縣制的支配を基礎としつつ、輸送を當然の前提としていたことが明らかなのである。

ここに至つて、均輸と鹽鐵が緊密に結合された理由が明らかとなる。販賣面において完全な官賣法を採用した以上、舊來商人が行つてきた鹽鐵の運搬を官自らが行わなければならない。當然鹽鐵專賣においても運搬の合理化が要請される。その均輸による運用は、無駄を省き需要をにらみつつ適切に供給することを可能とし、大きな收益を擧げることができたのであらう。この成果は桑弘羊に自信を與えるとともに、彼をして鹽鐵專賣にも積極的に関與させることになつたのである。

## 五

元封元年（前一一〇）、桑弘羊は治粟都尉<sup>(1)</sup>領大農となり、均輸の全面的施行と平準の設置を行つた。平準書に次の如く述べる。

而桑弘羊爲治粟都尉、領大農、盡代僅筭天下鹽鐵。弘羊以諸官各自市、相與爭、物故騰躍、而天下賦輸或不償其僦費。乃請置大農部丞數十人、分部主郡國、各往往縣置均輸鹽鐵官、令遠方各以其物貴時商賈所轉販者爲賦、而相灌輸。置平準于京師、都受天下委輸。召工官治車諸器、皆仰給大農。大農之諸官、盡籠天下之貨物、貴即賣之、賤則買

之。如此、富商大賈、無所牟大利、則反本、而萬物不得騰踊。故抑天下物。名曰平準。天子以爲然、許之。

史記卷一三〇太史公自序によれば、司馬遷は官が「本を去つて末に趨つた」顛末を記すために平準書を書いた。桑弘羊の代表的財政策たる均輸平準の中でもとりわけ商業的性格が濃いのは平準であり、それは卜式の「今弘羊令吏坐市列肆、販物求利」（平準書）という言葉に示されている。それ故に「平準」と題したのである。平準書が客觀的記錄の形で、即ち事實の記載による批判をこそ骨子とする以上、我々は批判の核心たる均輸平準關係の記事の確かさを思わざるをえない。右の文は上奏文の節略ではあるが、極めて信頼性の高い史料とみなすことができる。一方、二九年後の昭帝始元六年（前八一）に行われた鹽鐵論議を基にして著述された桓寬の鹽鐵論本篇において、桑弘羊は次の如く述べる。

往者郡・國・諸侯、各以其物貢輸、往來煩雜、物多苦惡、或不償其費。故郡置輸官、以相給運、而使遠方之貢、故曰均輸。開委府于京師、以籠貨物、賤即買、貴則賣、是以縣官不失實、商賈無所貿利、故曰平準。

これについて、かつて影山氏は、鹽鐵論中に「司馬子言」とあるが、桑弘羊が史記を讀んだ可能性があるものの、史記の完成後でもないこの時期の論争中において地方出身の文學などに對して「司馬子」を持ち出してもその權威性は疑わしく、桓寬の書き加えたものであらうこと、そしてまた鹽鐵論では史記の平準書・貨殖列傳からの要約引用が多いが、それは桓寬がこれらを参照しながら書いたからであらうとした。<sup>63</sup>この可能性は否定できない。しかし微妙な差異も存し、少なくとも右引用部分は實際の論議を踏まえたものと考ええる。その差異點は論議であること、均輸創設の意義を強調していること、及び昭帝代の均輸の現状によって生じたものであらう。

影山氏は鹽鐵論中の「以其物貢輸」に注目して、序で述べたような均輸論を展開した。それに對する批判は前述の如く筆者の舊稿で行っており詳述はしない。若干附け加えておくと、影山氏は後漢書卷一一劉盆子傳の「賜滎陽均輸官地、以爲列肆、使食其稅終身」という記事につけられた唐の李賢注に、

桓寬鹽鐵論云、郡國諸侯、各以其方物貢輸、往來、物多苦惡、不償其費。故郡國置輸官、以相給運、故曰均輸。



とあるのに基いて、「方物」の「貢輸」であることを強調する。しかしこの李賢注引鹽鐵論には問題が多い。續漢書百官志三大司農條の梁の劉昭注引のもの、及び唐の杜佑の通典卷一一平準引用のものと比較すると、劉昭注・通典は基本的に現行鹽鐵論に一致し、李賢注のものだけが傍圈を附した如く異同が大きく、それに依據することは危険なのである。<sup>64)</sup>

以上述べた如く、元封元年段階の均輸については平準書の記事に據らなければならない。それによれば、これ以前孔僅が管掌していた鹽鐵を桑弘羊が完全に掌握したことが述べられており、これは「均輸鹽鐵官」の設置と關係する。さて桑弘羊によれば、均輸の全國的設置と改革、及び京師に平準の設置を必要とした理由は二つある。第一は京師において中央諸官が各自必要物資を購入したことによる物價騰貴であり、第二は賦錢の輸送に僦費を償わないものがあつたということである。前者はこの時代各官の必要物資は各官が自ら調達するという自給制<sup>65)</sup>がとられていたことに起因する。これは京師において官需物資を一手に引受けた平準の設置によって解決され、またそれによって各官の自給制が次第に大農からの支給制に改められていくことになる。第二の理由は正に運搬に關係するが故に均輸の問題となる。しかもその對象が、賈誼新書卷三屬遠に(秦代のこととして)、

而來一錢之賦、數十錢之費。

と述べられるような問題を抱えた賦錢であつたために、均輸の設置は全國的に擴大されざるをえない。なぜなら、賦とはこの當時一五歳から六〇歳までの男女から毎年一二〇錢を徴收した算賦<sup>66)</sup>であり、これは天下遍く徴收されるものであつたからである。文・景帝期の南郡或いは臨江國の江陵縣西郷の文書たる鳳凰山十號漢墓出土の五號木牘(池田溫「中國古代籍帳研究」一九七九年、「諸種文書」八二)や四號木牘(同八三)によれば、里正が徴收した算賦<sup>67)</sup>を郷吏が集め、それを「吏奉」・「傳徒」・「傳送」・「轉費」・「繕兵」等に支出している。一か月に三、四回、算毎に何錢という形で徴收される算賦はこのようなものに支出されたのである。このうち「轉費」と「傳送」については、「轉費」は輸送費、「傳送」は錢を上級機關或いは中央へ上輸することとする裘錫圭氏の解釋が正しいものと思われる。「吏奉」は郷吏・里正等の俸錢であらう。

また「傳送」には様々な場合が考えられる。中央への上輸や郡・縣への送附のみならず、居延漢簡によって知られる如く、賦錢や衣料は各郡國から邊郡へ直送されており、米田賢次郎氏は國境線を區分して一區毎に衣服は某郡擔當、俸錢は某郡擔當とした可能性を指摘している<sup>(40)</sup>。

ところで算賦一二〇錢<sup>(41)</sup>とは一體どの段階での額なのであろうか。ここに至って、漢書卷一下高帝紀下一一年（前一九〇）二月の、

欲省賦甚。今獻未有程、吏或多賦以爲獻、而諸侯王尤多、民疾之。令諸侯王通侯常以十月朝獻、及郡各以其口數率、人歲六十三錢、以給獻費。

という詔が問題となる。これについては舊來解釋が分れてきた<sup>(42)</sup>。その中であって平中荅次氏は「六十三」は「二十三」の誤りで、口錢二三錢のことではないか、と推測したことがあるがそれは當らない。何よりも賦の徵收に關係したものであることに注意しなければならず、既に筆者が述べた如く、異姓諸侯王取り潰し策とともに、經濟的にも壓迫を加えるべく王國から強制的に毎口六三錢を獻納させたものであり、直轄郡においても算賦のうち六三錢を中央への上輸分としたのである。「量吏祿、度官用、以賦於民」（平準書）という量出制入原則による財政運営を行った漢初においては、算賦の徵收額は變動せざるをえない。とは言っても無制限であってはならず、郡段階での額を一二〇錢とし、本來一二〇錢のうち郡縣の吏俸や必要經費を除いた全額を上輸すべきであるが、邊境等への送附分もあり、また郡にも不時の出費に備えた備蓄があつたと推測されるので、六三錢を上輸させたのである。従つて郷段階での徵收額は必然的に一二〇錢以上とならざるをえない。上輸等の輸送費は轉費等の名目によつて徵收され、その運搬には郷人を徵用したのであろう。それ故、たとえ一二〇錢という額に増減がなくても、多事であればあるほど民衆は多額の算賦を納めなければならない。たとえ國家は「加賦」のそしりを免れても、事實は「加賦」・「役繁重」という事態を引起さざるをえず、武帝代新財政政策を必要とした一因として、このような形で重い稅役を課された民衆の疲弊が限界に達していたことを附け加えておきたい。

一方、王國においては、その全額を財庫に入れることができ、王國の百官の俸祿以下の諸経費に充當した。それだけに毎口六三錢の獻納強制は王國の財政に打撃を與えざるをえなかった。そしてこの六三錢は中央では帝室財政の收入となった。しかし前述の如く、吳楚七國の亂後、賦役の中央への回收によって王國の算賦は上輸されて國家財政に入れられ、もはや算賦收入の中から王の経費に充當されるものとはなくなった。右の如き賦役徴收權のもつ意味を考えれば、如何に王の打撃が大きかったか想像がつくであらう。そしてまた漢も王に六三錢獻納を強制する必要もなくなったし、「税租に衣食するのみ」(漢書卷一四諸侯王表序)となった王國はもはやそれを負擔できなかった。かくして貢獻は後漢代の越布の如き(後漢書卷八一獨行・陸續傳)特産物を貢納する郡・國の貢獻と、諸侯王・列侯の貢獻・酎金に整理され、王・侯はこれによって貢職を奉じたのである。<sup>45)</sup>

以上の論述によって、影山氏の主張する漢初の六三錢貢獻を改編したという説の成立し難いことが明らかとなったし、また賦錢の輸送が抱えていた問題點も浮彫りになったものと考ええる。そこに「倣費を償わず」と述べられる理由があり、何よりもこの賦輸＝賦錢の輸送を改革することが桑弘羊の目的であった。そしてその改革は、物資調達・運搬機關としての均輸に官營商業的機能をもたせるといふ、劃期的なものとなった。「各その物の貴き時(食貨志は「如異時」)商賈の轉販する所の者を以て賦と爲す」とは、特に遠方の倣費を償わない賦錢を商品價値の高い物品に轉換することを示している。たとえ運送費に十錢かけたとしても一錢の錢は一錢の價値しかない。しかしその一錢を他の地區に運んで高價に賣ることができるような物品に轉換すれば、十一錢のみならず二十錢でも賣れるであらう。その場合も「百里不販樵、千里不販糴」(史記卷一二九貨殖列傳)という商業の原則は貫徹されなければならない。附加價値の高い輕貨にして始めてこの條件を満たしうるのであるから各地特産の布帛類がその中心となるのは當然であった。しかも平準と結合することによって「大農の諸官が盡く天下の貨物を籠した」のであるから、均輸の扱う物品はそれにとどまらず、およそ附加價値の高いものであれば皆扱ったであらう。物資の獨占がもたらす利の大きさを熟知している桑弘羊は、武帝の信任の下、舊來の財政

の枠組みにとらわれることなく積極的な經營を企圖するに至つたのである。それは以下の事柄によつても示されよう。

「工官を召して、車・諸器を治め」しめたことは、舊來の、官營手工業は少府の管轄とする原則に改變を迫るものであつた。その製作費用は皆大農が支出したのであるが、問題はその「車・諸器」である。常識的に考えれば均輸平準の施行に必要なものを製作したとされようが、それだけにとどまらない。俞偉超氏は、蜀郡・廣漢郡の工官作製の漆器が唯に皇帝の用に供されたのみならず、販賣もされた可能性を指摘し、武帝代、財政收入増加を目的としてそれまで市府管轄であつたものを中央直轄にしたとする。<sup>(40)</sup> 簡単な指摘ではあるが、貴重な見解であると思われる。工官の製品は非常に高價なものであつたが、品質が優れ、且つは名譽あるものとして京師を始め各地の富人等に購入されたと考えるべきであらう。物資の獨占はこのような手工業製品にまで及ぶべきであつたし、それはまた官自らの生産面への關與を擴大した。宣帝の時、大司農中丞耿壽昌は海租を三倍にするように提言し、許可されたが、それに對して御史大夫蕭望之は、

長老皆言、武帝時、縣官嘗自漁、海魚不出、後復予民、魚乃出。(漢書食貨志上)

と述べて反對した。この武帝代に官自らが漁業を營んだという事實は重要である。單に海租を徴收し、或いは海產物を收買するのではなく、積極的に漁業經營を行つたのである。長老の言によれば當然民衆の漁業は禁止された。少府による海租の徴收は、古くは海產物そのものを一定の割合で徴收したのであろうが、漁業收益への課税であつて物そのものの獲得を目的としていない。一方、均輸はあらゆる商品價值の高い物品の獨占をめざした。従つて「官自漁」とは均輸の一環として海岸地帯で實施された官營漁業であつたと考えねばならない。そしてこれは必然的に少府收入の海租を大農に移管したことを意味する。宣帝代においても少府丞ではなく、大司農中丞の耿壽昌が海租の増額を要請しているから海租は大司農の所管であつたと思われるが、漢書卷一二平帝紀元始元年(後一)に、「置少府海丞・果丞各一人。」とある如く、少府の丞の一つとして海租を擔當した海丞の存在が知られるから、少なくとも前漢末には海租は少府に移管されていたのである。

かくして物資・運搬の獨占を果した均輸と、京師における官需物資の購入を一手に引受け、且つ均輸の物品及び工官製

作の器物による市價平準と賣買收益獲得をめざした平準の存在によって大農の収益は増し、本來であれば皇帝の恩寵として帝室財政から支出される筈の賞賜<sup>47</sup>も大農から支出されるに至り、正に國家・帝室兩財政相俟って武帝の欲望充足に寄與したのである。

さてそれでは物資の調達<sup>48</sup>の具體的状況は如何。縣官自營の場合は除き、賦錢の轉換を問題にしなければならない。それは鹽鐵論本篇の文學の言に明瞭に示されている。

古者之賦稅於民也、因其所工、不求所拙。農人納其獲、女工效其功。今釋其所有、責其所無、百姓賤賣貨物、以便上求。閒者、郡國或令民作布絮、吏恣留難、與之爲市。吏之所入、非獨齊阿之縑・蜀漢之布也。亦民閒之所爲耳。行姦賣平、農民重苦、女工再稅、未見輸之均也。

「古においては穀物と布帛を税として納めるも、今はそれを賣って錢に換えて算賦を納めねばならぬ。しかもこの頃官は均輸の物資調達のために民間から布帛等を買上げているが、吏はあれこれと難くせをつけては買いたたく。これでは二度税を納めているようなものだ。」この文學の言によって、布帛等が直接賦課の形ではなく、買収によって調達されたことがわかる。

郷里においては、吏俸も轉費も必要なのであるから、算賦の徵收状況に何ら變化がなかったが、問題は郡縣段階であった。縣に集められた賦錢のうち上輸分を附加價值の高い物品に轉換し、均輸を通じて送附したのである。この收買に當ったのが均輸官であり、これまでは郷において支出した運搬費をこの均輸官に納入させ、均輸官が僦人を組織して運搬し、且つ賣買も行った。それだけに均輸官は貯藏・交易の施設を有し、しかも車馬輻湊するのであるから廣大な面積を必要とした。前述の劉盆子傳の滎陽均輸官の地はそのようなものであったと考えられる。そして文學が「利のために萬物を買っている」と非難する如く、均輸の官營商業的性格は明瞭であらう。正に桑弘羊は均輸平準によって物資・運搬・販賣の獨占を果した。しかも大農所管の鹽鐵も均輸による運搬體系の中に組込まれたし、京師の太倉や各地の倉へ漕運された米穀

もまた彼の手に握られているのであるから、少なくとも官需物資は商人の手を経る必要がなくなった。また商人にしても全国的な輸送網をもつ均輸に對抗して遠隔地交易を営んでも、もはやその利は昔日の如くではありえなかった。市井及び山澤の税収の減少を補って餘りある収入を均輸平準が擧げることができたからこそ彼は一層武帝に寵遇されたのである。

## 六

最後に、残された問題である運営機構と桑弘羊以後の均輸平準を検討したい。漢書百官公卿表上によれば、大司農屬官に均輸令・平準令があり、また水衡都尉屬官にも均輸令があり、太常及び少府には均官長<sup>48</sup>が置かれていた。一方、千乘郡に「均輸官」（漢書卷二八上地理志上）、河東郡に「均輸長」（同卷八九循吏・黃霸傳）、遼東に「均長」（封泥攷略卷四）があったこと、また滎陽にも均輸官があったことは前述の劉盆子傳に明らかである。しかしそれにしても少ない。殊に地理志にわずか一か所しか見えないということは、桑弘羊が全国的に均輸官を設置したという状況からすれば、不思議である。そこに序で述べた馬元材氏の言う、地理志所見の木官（蜀郡嚴道縣）や橘官（巴郡胸忍縣）などの諸官を均輸官とする説が浮び上ってくる。しかも前節で述べた如く、桑弘羊の均輸法においては生産面でも官自營が擴大強化されているのである。特産地に設置された均輸官が右の如き物品の收買のみならず、官自らその生産を行った所も多かったであろう。しかしこの場合も、先述の海租と同様後年には少府に移管され、官の直接經營もあるものの、主に收税・收買機關として存続したとみるべきである。また陳直氏の指摘する如く、現存封泥中に「嚴道令」<sup>49</sup>以下の嚴道關係の封泥が多見するのはこの地の「嚴道橘丞」の下にあった「嚴道橘園」からの貢獻が多かったためであろうが、このような縣直營の橘園も桑弘羊時代には均輸の中に組込まれていたものと思われる。

このような桑弘羊時代とそれ以後との差異を前提とするならば、工官にも變化が生じてしかるべきである。成帝元延元年（前一二）の谷永の對に、

臣願陛下勿許加賦之奏、益減大官・導官・中御府・均官・掌畜・廩犧用度、止尙方・織室・京師郡國工服官發輪造作、以助大司農。(漢書卷八五谷永傳)

とある。これによって少府の均官の用度が大きいものであったこと、京師・郡・國の工官・服官の發輪造作が尙方や織室と同様、皇帝の使用に供するために行われ、大司農には關係しないものになっていたことがわかる。即ち、桑弘羊時代に大司農の經營の下に組込まれていた工官・服官は少府に移管され、官營手工業の本來の姿たる皇帝への奉仕を第一とする經營に變っていたのである。

このように考えれば、當然均輸平準そのものの性格變化を想定しなければならない。前漢末まで中央及び地方に均輸官が存在したことは確かである。しかし鹽鐵論においてあれほど文學の非難を浴びた均輸はそれ以後ほとんど問題にされていない。天子に節儉を勧め、錢を廢し、近臣の家の商業經營を禁ずるよう提案した儒者貢禹の言中に均輸は見られない(漢書卷七十二貢禹傳)。また元帝の初元五年(前四四)、從來から民と利を爭うものとして指彈されてきた鹽鐵專賣と常平倉が罷められたのに(同卷九元帝紀・同食貨志上)、文學によってその商業的性格と後世の和買的性格を非難されている均輸については言及されないのである。これは當時の均輸平準が桑弘羊時代とは異なっていたことを證明する。均輸については、設立當初の如き物資調達・運搬機關としての性格を強め、物資・運搬・販賣の獨占をめざしたものから後退したとみなしうる。鮑宣の哀帝への上書中に「三輔委輸官」(同卷七十二鮑宣傳)と見えるのも、この時三輔地區に均輸官が存在したととともに、それが物資輸送に力點を置くものに變っていたから「委輸官」と稱したと考えるべきではなからうか。また平準は官需物資の收買と、均輸を始めとする諸官の餘剩物資を賣却するという職務を主とするようになり、桑弘羊時代の如き積極的商行爲を行わなくなったものと考ええる。そしてその收買・賣却は市中に設置された平準分署において行い、また平準に諸物資が集中するので、都内と並ぶ財庫官的役割をもつことになった。<sup>(5)</sup>このように均輸平準の變化を考えた上で改めて均輸の機構について述べる。

元鼎二年、大農屬官として設置された均輸令は地方の均輸官を統轄しつつ均輸の全般を擔當したが、同時にそれは京師の均輸官でもあるという二重性を有することになる。次いで元封元年、桑弘羊が均輸を全國的に設置すると、各郡國にある均輸及び鹽鐵官は數十人の大農部丞の直接指揮下に置かれ、その全體の統制は桑弘羊直屬の大農部局が擔當した。一方、均輸の設置は物資全般の運輸に關係するが故に、多くの苑囿・離宮・公田等を抱えた少府や上林苑・鑄錢を擔當した水衡都尉（元鼎二年設置）、及び陵園・陵縣を擔當した太常にも均輸官が置かれることになった。地方においては郡治・國治のみならず、交通上、物資確保上重要な縣には全て設置され、均輸・鹽鐵の緊密な運営を策した。しかし均輸の變質に伴い、交通上の要地のもののみが残り、橋などの産地に設けられたものは橋官などとして少府の所屬に改められた。そしてこの段階での京師の均輸令は元鼎二年段階と同様な性格を有した。<sup>64)</sup>

## 結

以上の論述によつて本稿の目的とした均輸平準をめぐる諸問題の解明という課題はほぼ果されたものと考ええる。全面的に展開された均輸平準においては正に物資・運搬・販賣の獨占の上に立つた國營商業と規定できる内容もち、それは桑弘羊の財政理念の體現でもあった。かくの如き國家權力を背景にした獨占は當代の商人に大きな打撃を與え、たとえ制度を逆手にとつて利を擧げたにしてもその利は昔日の比ではなく、特に運搬を獨占された大規模客商の受けた打撃は深刻であつたらう。<sup>65)</sup> 正に鹽鐵論に、

富在術數、不在勞身、利在勢居、不在力耕也。（通有篇）

夫白圭之廢著、子貢之三至千金、豈必賴之民哉。運之方寸、轉之息耗、取之貴賤之間耳。（貧富篇）

とある如く、商業的操作を讚美・主張する桑弘羊の勝利であつた。しかし彼は、

且利不從天來、不從地出、一取之民間、謂之百倍、此計之失者也。（同非歟篇）



という文學の鋭い批判を甘受しなければならぬ。商業的操作による流通過程からの收利は無限であるかに見えながら、それは結局生産に制約されているのであるから。たとえ彼の生存中はその卓越した能力を以って維持したとしても、早晩均輸の商業的操作は行き詰まらざるをえない。まして前漢後期の諸生産の衰退下においてはなおさらであった。とは言え、運搬機關として均輸は優れたものであり、その存在そのものが客商の利を大きく減少させたことは否めないのである。

更にまた桑弘羊は鹽鐵論貧富篇において、

車馬衣服之用、妻子僕養之費、量入爲出、儉節以居之、奉祿賞賜、一二籌策之、積浸以致富成業。

と述べる如く、家政においては量入制出原則をとったのであるが、これは商人の資本蓄積過程での原則に過ぎず、財政運営において彼は量出制入によって租賦を増額しないまでも多方面からの収入を計ったとすべきであろう。そしてこの原則は桑弘羊の時代には可能であつてもたちまち行き詰まらざるをえない。財源不足の事態になった時、官僚は加賦や鹽鐵の増額等を提案するが、それに對する反對は強く、かと言って儒家官僚もせいぜい節儉策しか主張できない。好むと好まざるに拘らず量入制出の財政運営を強いられる時代になつていったのである。

## 註

- (1) 馬元材『桑弘羊年譜』(一九三四年)、朱希祖『桑弘羊之經濟政策 附桑弘羊年表』(『北京大學社會科學季刊』四卷一・二號一九三四年)、安作璋『論桑弘羊』(『漢史初探』一九五五年)、陳直『漢書新證』(一九七九年版)、侯家駒『均輸平準小考』(『大陸雜誌』五八卷四期一九七九年)、佐伯富『王安石』(一九四一年)、『中國史研究第三』一九七七年所收三八五頁、吉田虎雄『兩漢租稅の研究』(一九四二年)、内藤湖南『支那上古史』(一九四四年)、『内藤湖南全集第十卷』一九六九年所收一九五頁)、五井直弘『均輸法』(『アジア歴史事典第三卷』一九六〇年)、平中幸次『秦漢時代の財政機構』(『古代史講座五』一九六二年)、『中國古代の田制と稅法』一九六七年所收四〇三・四四頁、影山剛『均輸・平準と鹽鐵專賣』(『岩波講座世界歷史四』一九七〇年)、西嶋定生『中國の歴史二、秦漢帝國』(一九七四年二二三・四頁)などがある。
- (2) 吉田前掲著書。
- (3) 陳直前掲著書二一九九頁參照。

- (4) 馬元材前掲著書。
- (5) 影山前掲論文。
- (6) 拙稿「漢代財政制度變革の經濟的要因について」(『集刊東洋學』三一號一九七四年)注④。影山説の實證的問題點は以後の論述の中でも述べるが、ここで一つだけ、後漢書卷四三朱暉傳の「布帛爲租」とある句は均輸の問題と直接的な關係がない、ということを描しておく。
- (7) 侯家駒前掲論文。
- (8) 通説的な理解を得るため、佐伯前掲著書、周藤吉之氏執筆『中國の歴史五 五代・宋』(一九七四年・三三・三頁)、漆俠『王安石變法』(一九七九年版)などを参照した。
- (9) 前掲拙稿。徵役權については拙稿「漢代の算と役」(『東北大學教養部紀要』二八號一九七八年)参照。
- (10) この圖に關する詳細な考察は省略するが、一、二説明しておきたい。筆者は「漢代財政制度に關する一考察」(『北海道教育大學紀要』第一部B二三卷一號一九七二年)において、漢初の將作少府の經費は少府の負擔で、景帝中六年(前一四四)、將作大匠と改めて以後、國家財政の支出となったであろうことを推測した。また袁仲一・程學華「秦代中央官署製陶業的陶文」(『考古與文物』一九八〇年三期)で、秦始皇陵陵園出土の陶文「大匠」を以て將作大匠の省文とする。これについては、將作少府に諸匠の長として大匠の官があったが、將作少府の改名に當つてこの大匠を中心にした官府に改編したのではないか、という推測を記するにとどめる。幹官については加藤繁「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」(『支那經濟史考證上』一九五二年)及び陳直前掲著書九八頁を参照。また衡官の如く職務を確定し難いものは後考を俟つことにした。
- (11) 前掲拙稿「漢代財政制度に關する一考察」において、この記事によつて漢初の治粟內史が算賦をも管掌していたことを指摘した。
- (12) 大庭脩「漢王朝の支配機構」(『岩波講座世界歴史四』一九七〇年)。
- (13) 前掲拙稿「漢代財政制度に關する一考察」。
- (14) 前掲著書一九二頁。
- (15) 以上いずれも平準書。なお、影山剛「卜式について」(『三上次男博士頌壽記念東洋史・考古學論集』一九七九年)・伊藤徳男「漢代鹽鐵專賣制の實施について」(『東北學院大學論集、歷史學・地理學』一〇號一九八〇年)参照。
- (16) 影山剛「鹽鐵專賣制施行の時期その他雜考」(『福井大學學藝學部紀要』Ⅲ社會科學一號一九六二年)・多田狹介「前漢武帝代の酷吏張湯について」(『東洋史研究』三六卷二號一九七七年)・稻葉一郎「桑弘羊の財政策」(『立命館文學』四一八〜四二二號一九八〇年)参照。
- (17) 史記卷二二汲鄭列傳に「鄭莊在朝、常趨和承意、不敢甚引當否。」という。
- (18) 『考古』一九八〇年二期・『考古與文物』一九八〇年三期・同一年一期。
- (19) 『文物』一九七八年一期。
- (20) 加藤前掲論文。

(21) 舊唐書卷一一八楊炎傳の、歲入の大盈內庫から左藏への移管が參考となる。

(22) 以上の如く考えれば、鹽鐵專賣を武帝の面前で審議するようになったのは移管決定以後としなければならない。鹽鐵を山澤園池の稅から切り離して移管した時、その積極的經營が要求されたが、武帝の諮問に答える形で有能な鹽鐵家として東郭咸陽と孔僅が鄭當時によつて推薦され、兩者が大農丞に就任して以後專賣制の具體案の作成が進められたのであらう。鹽鐵專賣制の立案者については諸說あるが、鹽鐵の積極的經營を一任された孔・東郭兩名が大鹽鐵業者の經營法——流通販賣の獨占化による利益追求——を國家の統治機構を以つて全國的規模に擴大することを策したとする考えも否定できないし、一方武帝代政策決定のプロセスを考えると側近の財政エキスパートたる桑弘羊による大綱立案の可能性もある。專賣制の立案者はこの兩者いずれかにしぼられよう。その場合、孔僅が專賣の功を以つて大農令に就任し、一方桑弘羊が均輸を創設し、その擴張の過程で鹽鐵を取り込むことからすれば、孔僅らの立案施行、桑弘羊の擴充發展とみることができる。鹽鐵專賣制におけるこの兩者の關係を、唐の第五琦と劉晏の關係にあてはめうるものと考ええる。なお諸家の見解については稻葉前掲論文を参照。

(23) 漢書食貨志は「大司農中丞」とするが平準書が正しい。漢書では大司農と改名される太初元年（前一〇四）以前の記事にも大司農を用いることが多い。また中丞は宣帝代にその存在が知られるが、大司農の二丞のうち、重要な職務である出納を擔當した丞を中丞と稱した可能性を指摘するにとどめておく。

(24) 前掲著書一七七頁。

(25) 前掲論文。

(26) 『中國古代工業史の研究』（一九六二年 四三三頁）。

(27) 『前漢朝の鹽の專賣制（二）』（『史學雜誌』七五編一二號一九六六年）。

(28) 前掲著書四六頁。

(29) 影山前掲「鹽鐵專賣制施行の時期その他雜考」。

(30) 前掲拙稿「漢代財政制度に關する一考察」。

(31) 搜粟都尉とする説もあるが、西嶋定生「代田法の新解釋」（『中國經濟史研究』一九六六年）も述べる如く、治粟都尉とすべきである。

(32) 「諸侯」とは諸侯王のこと。鹽鐵論中の「諸侯」は、一般的な身分、春秋戰國期の諸侯、及び漢代の諸侯王を指す三つの場合がある。

(33) 「鹽鐵論について」（『福井大學學藝學部紀要』Ⅲ社會科學四號一九五五年）。

(34) 鹽鐵論の「故郡置輸官」は、當初、直轄郡にのみ均輸官を置いたことを示し、これを「郡國」に改めるべきではない。

(35) 周筠溪「兩漢財政制度之一班」（『食貨』三卷八期一九三六年）。

(36) 前掲拙稿「漢代の算と役」。

(37) この文書については、拙稿「鳳凰山十號墓文書と漢初の商業」（『東北大學教養部紀要』三三號一九八一年）参照。

(38) 算賦については永田英正「江陵鳳凰山十號漢墓出土の簡牘——とくに算錢を中心として——」（『森鹿三博士頌壽記念論文集』一九七七年）参照。

(39) 「湖北江陵鳳凰山十號漢墓出土簡牘考釋」(『文物』一九七四年七期)。

(40) 「秦漢帝國の軍事組織」(『古代史講座五』一九六二年)。

(41) 一二〇錢について、永田前掲論文では一〇錢ずつ一二か月徴收したことに基くとし、渡邊信一郎氏は阡陌制の二四〇步一畝制に關係するとする(『近代中國における專制國家形態についての覺書』『新しい歴史學のために』一五八號一九八〇年)。

(42) 加藤前掲論文及び吉田前掲著書では貢獻とし、宮崎市定「古代中國賦稅制度」(『アジア史研究一』一九五七年)は漢直轄郡では算賦一二〇錢のうち六三錢を上輸し、残りの五七錢で地方財政の處理を行ったとする。また王毓銓『民數』與漢代封建政權(『中國史研究』一九七九年二期)は、貢とは異なる獻であり、後に酎金に變じたとする。

(43) 平中「漢代の馬口錢と口錢」(同氏前掲著書三二三頁)。但し、同書三九六頁ではこの説を主張せず、三錢は武帝の時の追加とする。

(44) 前掲拙稿「漢代財政制度變革の經濟的要因について」注③・「鳳凰山十號墓文書と漢初の商業」。

(45) 鹽鐵論本議篇で大夫が「貢輸」改革を強調するのは、均輸創設當時の物資輸送の合理化と、後述の如き元封以後の均輸による物資獨占という現實を踏まえたものであり、「貢輸」の主體は賦錢を轉換した實物の上輸であった。そして諸物の獨占を實現するために元封以降、貢獻にも中央の必要に基く枠がはめられたと思われる。

(本稿は昭和五五年度科學研究費一般研究(C)「漢代財政史の基礎的・總合的研究」の研究成果の一部である。)

(46) 「關於鳳凰山一六八號漢墓座談紀要」(『文物』一九七五年九期一六頁)。

(47) 加藤前掲論文。

(48) 大庭前掲論文(二九二頁)は太常の均官の職掌を帝陵上の枯木を選び出し處分することとする。しかしその所屬は異なっても官名が同一の場合にはその職掌の類似性を考慮しなければならない。陳直氏は前掲著書一〇四頁で、均官乃至均監は均輸官の省文であるとするが、正當なものと考ええる。

(49) 『史記新證』(一九七九年)一五〇頁。

(50) 拙稿「後漢の大司農と少府」(『史流』一八號一九七七年)。

(51) 桑弘羊以後においても、均輸的運搬法は各種の物資運搬に採用され、たとえ均輸官が置かれていなくてもその原理を應用したことを思われ、それは「調均」(漢書卷二九溝洫志)という言葉や九章算術卷六均輸の例題に現われている。同様に平準の物價調節機能も市における「平準賣買」(蕭吉五行大義第二二論諸官條引洪範五行傳)に定着していった。

(52) また卜式の言う如く、船算(及び算商車)の存在が商者を少くしている状況(平準書)にも注意しなければならない。

(53) 拙稿「近年の秦漢史研究をめぐって——好並隆司・谷川道雄・渡邊信一郎三氏の研究を中心として——」(『集刊東洋學』四二號一九七九年)。

(54) 桑弘羊の家政については稻葉前掲論文参照。

(55) 漢書卷八四翟方進傳。この史料については拙稿「王莽代の財政」(『集刊東洋學』三三號一九七五年)参照。

# THE PROGRAMS OF THE “EQUALIZATION THROUGH TRANSPORTATION” AND THE “BALANCED STANDARD” AND SANG HONG-YANG 桑弘羊

—Financial Administration of the Government  
and Commercial Activity in Ancient China—

YAMADA Katsuyoshi

The policies of the “equalization through transportation” and the “balanced standard” implemented by Sang Hong-yang during the Former Han 前漢 under the reign of Wudi 武帝 involved the following points.

During the second year of the era *yuanding* 元鼎 (115 B.C.), Sang Hong-yang, acting as the assistant to the minister of agriculture, appointed *junshuling* 均輸令 (officers of “equalization through transportation”) to the ministry of agriculture, and *junshuguan* 均輸官 to the provincial district administrations. This was to constitute the system by which goods essential to the ministry of agriculture were to be distributed and transported. Up to this time, the government had relied upon contracts with agents of the ministry of agriculture, and the buying of merchants, to distribute goods. Abuses of the system had been rampant. In the sixth year of the era *yuanding* (111 B.C.), the government however made regulations through these offices for “equalization through transportation” in order to rationalize a policy of governmental monopoly in the transport of iron and salt. The government raised a large revenue in this way.

In the first year of the era *yuanyang* 元封 (110 B.C.), Sang Hong-yang was made secretary in charge of grain and put in control of the ministry of agriculture. He effected the policy of “equalization through transportation” throughout the empire. In the capital, he established the “balanced standard” which, in one stroke, guaranteed the purchase of goods required by the offices. Thus, the twenty or thirty assistants appointed to the ministry of agriculture directly supervised all the provincial district *junshuguan*, as well as the salt and iron offices. At this point, the central *junshuguan*, responsible for the transportation and sale of goods purchased in the locality of their production, thus had acquired a commercial aspect. The capital

requirements for the purchase of goods by the *junshuguan* were met by taxes sent previously to the government from the provincial districts. Under the policy of "equalization through transportation", the *junshuguan* also received those funds drawn previously from *suanfu* 算賦 taxes and allocated to cover transportation costs. They organized agents of the ministry of agriculture to transport the goods. Furthermore, under the system of distribution effected by the "equalization through transportation", even the productive potential of enterprises such as fishing depended upon the direct management by government officials. The central government office tried to monopolize, by any means possible, all high-priced goods. The "balanced standard" involved not only the purchase of goods required by government offices. It also involved the regulation of prices by means of the accumulation of goods in the capital through "equalization through transportation", as well as any means of the production of articles by government artisans. In buying and selling, the government moreover raised large revenues. Hence, the programs of the "equalization through transportation" and the "balanced standard", based upon a policy of governmental monopoly of goods, transportation, and selling, signified the regulations of a commercial enterprise operated by the government.

However, after Sang Hong-yang's time, the inherently commercial policies of the "equalization through transportation" and the "balanced standard" had to be changed.